

## 年間第4主日（2月1日）

### [説教]

私たちは皆、幸せになりたいと願っています。だから、主イエスの招きに応えて、こうして集まっています。

今日の福音は、主からの、本当の幸いへの招きです。

私たちは今日、この福音を、皆で分かち合い、それぞれの生活の場で出会う人々に、幸いの福音を伝えていきたいと思います。

「心の貧しい人は、幸いである」。幸いの福音は、この言葉で始まります。

「心の貧しい人」とは、どのような人でしょうか。それは、自分が貧しい者であることを忘れず、謙虚に生きている人のことです。私たちは誰一人として、自分の力だけで生きている者はいません。まわりのいのちに支えられて生きているはずです。

本当に自分の力で生きようとしたら、食べ物や着る物を自分で作らなければなりません。自分の住む家も自分で建てなければなりません。公共交通機関を利用することができません。病気になっても病院に行くこともできません。さらに、生活に必要な物を全部自力で手に入れたとしても、それは、この地球といのちから、さまざまなものを与えられているから、この地球というところで生きているからできることなのです。

そして、信仰を持っている私たちは、神がともにいてくださらなければ、一瞬でも生きることはできないということを信じています。

心が貧しいということは、いのちの与え主である方に愛され、まわりのいのちに支えられて生きていることに、いつも感謝をしているということです。

毎日生きていけることを、決して当たり前だと思わないということです。

お金を払ったのだから当然だという思いを持たないということです。

朝まだくらい時でも、深夜でも開いている店があります。そこで、何かを買うと、スタッフの人は、「ありがとうございました」と言ってくれます。心が貧しいということは、この時感謝の気持ちをあらわすということです。こんな早くから、こんな遅くまで、働いてくれていることへの感謝です。買い物や食事に来た時に、待っていてくれたことへの感謝です。この仕事をしてくれていることへの、心からの感謝です。仕事だから当たり前だと思うのではなく、自分の代わりに、この仕事をしてくれていることへの感謝です。まわりの人がしてくれてことの価値を、金額などの数字ではなく、してくれていることの内容、ありがたみで見ることができる時、心の貧しい人となり、幸いな人となるのです。そして、まわりの人に対して、優しくなることができるのです。

私たちは皆、心の貧しい者です。皆で支え合って生きていかなければ生きていけないということを知っています。そして、私たちが本当に支え合って生きていれば、互いに感謝し合っていれば、この世界から、戦争、さまざまな暴力、不正、貧困、環境破壊などは起こらないはずです。

だから、心の貧しい人は、飢餓で目がうつろになっている子どもの姿や、戦争で愛する人を失った人の涙を目にする時、深い悲しみを覚えるはずです。自分の苦しみとして受け止めるはずです。何とかしたいと思い、悩むはずです。多くの人を苦しめている悪に、強い怒りを感じるはずです。人間として生きることを困難にする貧しさは、絶対に正当化されたり、美化されたりしてはならないと確信するはずです。

神が示される正義が、一日も早く実現してほしいと、心から願うはずです。「義に飢え渴く人」となるはずです。

心の貧しさは、貧しさの押しつけ合いではありません。貧しさの分かれ合いで。私たちは皆、貧しいのです。だれかとくらべて、より多くの物を持ったとしても、競争に勝ったとしても、貧しいのです。貧しさは、皆で分かれ合うしかないので。貧しさを避けることは、貧しさをなくすことはできないのです。そして、自分から貧しさをなくし、豊かになろうとする時、まわりの誰かを貧しくし、苦しめ、悲しませるのです。そこに、平和などないです。

だから、貧しさを分かれ合うしかないので。神の前での貧しさを皆で分かれ合う時、私たちは、いかに多くの恵みをいただいているかに気づき、まわりのいのちのありがたみが身に染みてきます。これこそが、「天の国」の幸いなのではないでしょうか。

しかし、今日の世界では、多くの人が、心の貧しさを認めようとしていません。心さえも失われつつあります。そうした世界にあって、私たち教会は、貧しさの中で生まれ、生き、十字架という、最も過酷な貧しさを背負って、自分のすべてをささげてくださった、今もささげて続けてくださっているキリストを宣べ伝えています。心の貧しさを忘れず、貧しいキリストが分かれ合ってくださる、幸いの福音、心の貧しさの福音を、これからも、勇気を持って宣べ伝えていきましょう。

「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」